

第3章

本会議・サイト活動

リッチモンド（インディアナ州）	24
ワシントン D.C.	30
ニューオリンズ.....	35
サンフランシスコ.....	40

リッチモンド（インディアナ州）（7月26日～8月1日）

- 7月26日（月）日本側参加者到着、歓迎
 - 7月27日（火）オリエンテーション
開会式
Tom Hamm 教授講演
 - 7月28日（水）インディアナ州政府による講演・レセプション
 - 7月29日（木）ホンダ自動車工場訪問
 - 7月30日（金）KASCとの合同ディスカッション
 - 7月31日（土）リッチモンド市内ツアー
 - 8月1日（日）ワシントンD.C.へ出発
- ※宿泊場所：Earlham College

■サイトテーマ

アメリカにおける日本の再発見
～日米の地域間交流から～

広大なトウモロコシ畑が広がり、アメリカの田園風景の面影がありながら、自動車関連産業を中心に多くの日系企業が進出しているインディアナ州。州都インディアナポリスは国内交通の要衝として、各産業を結ぶ「アメリカの十字路」とも言われる。そして、ジャパニーズ・スタディーズで有名な Earlham College のあるリッチモンドが、第62回日米学生会議始まりの地となる。Earlham College が1873年に日本人卒業生を輩出し、インディアナと日本の地域間交流の歴史は教育から始まった。そして今日では、インディアナと日本の各都市が相互に姉妹都市関係にあるなど、その関係は深い。第1サイトでは、日本との繋がりが、いかにインディアナの産業、教育、文化に影響を与えてきたのかを確認し、「アメリカにおける日本」を再発見したい。

■活動の指針と目標

- ・アメリカ側参加者と日本側参加者の相互理解のきっかけ作り
- ・アメリカの地方都市を知る
- ・アメリカにおける日系企業のプレゼンスを知る

- ・KASC(Korea-America Student Conference)との交流

■具体的活動

- ・開会式
久枝 譲治氏 在シカゴ日本国総領事
- ・Tom Hamm 教授による講演会
- ・スキットによる相互文化理解
- ・インディアナ州政府による講演会
- ・ホンダ自動車工場訪問
- ・KASCとの合同ディスカッション
- ・リッチモンド市内ツアー

7月26日（月）

日本側参加者到着

春合宿から3ヶ月間。ついに日本側参加者がアメリカに到着した。シカゴより乗り換えインディアナポリスへ。アメリカ側実行委員の出迎えによりアーラム大学へと到着した。彼らよりアーラム大学の案内を受けていたところ、アメリカ側参加者が急に現れ、歓迎のしるしとして、代々JASCに受け継がれているJASC Songを歌ってくれた。その後、初めて両国参加者が顔を合わせ、お互いに用意したプレゼントを交換しながら、まだ慣れない英語で自己紹介を行った。また、アイスブレイ

キングとして、ゲームで緊張をほぐし、全員で大学のカフェテリアで夕食をとった。寮の施設はともきれいで、参加者が集まって会話のできるスペースがあり、興奮を抑えきれず夜遅くまで話し込む参加者もいた。

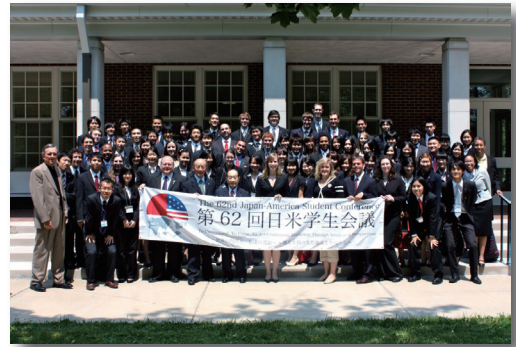


写真：緑あふれるアラム大学のキャンパス

7月27日(火)

オリエンテーション・開会式・Tom Hamm 教授講演

本会議のオリエンテーションを実行委員より受けた後、初の分科会セッションを行った。その後、開会式が行われ、主催団体、後援団体、両実行委員長からの挨拶、そして在シカゴ日本国総領事の久枝讓治氏からも歓迎を受けた。式の後にはアラムナイや後援者の方々などとの交流会を開き、JASCの伝統と重みについて実感した。その後、アラム大学のTom Hamm 教授により、アラムと根深い関係のあるキリスト友会 (Quaker) についてのご講演を頂いた。また、ジャパニーズ・スタディーズで有名なアラム大学と日本人学生の歴史についても学ぶことができた。夜にはお互い直前合宿で準備してきたスキットにより自国の文化を面白おかしく紹介し、さらに両国の距離を縮めたと同時に、JASC 参加者の隠れた笑いの才能に感動した。



写真：開会式後、ゲストと共に

7月28日(水)

州政府シンポジウム、フィールドトリップ、日本文化紹介

唯一の地方都市が本サイトであったため、インディアナ州政府による講演会にて、「地方」としてのアメリカを学ぶ機会を設けた。2割弱の労働人口が農業であるというインディアナ州の農業への取り組みや、インディアナ州が地域活性化のためにどのようなまちづくり政策を行っているかを学ぶことができた。また、多くの日系企業を誘致しているインディアナ州と日本企業の実態についても知ることができた。講演会の後は、州都に 있는ことを利用し、各分科会でフィールドトリップを実施した。その後、日本人協会やアラムナイの方々とのレセプションを行い、インディアナで働く日本人の方々と直に交流することができた。夜には、日本側参加者が主体となり、日本の制服や浴衣、書道、茶道などを紹介するパーティーを行った。



写真：インディアナ州政府フォーラム

第3章 本会議・サイト活動



写真：書道を体験するアメリカ側参加者

7月29日(木)

ホンダ工場 (HMIN) 訪問、分科会活動

この日はインディアナにおける日系企業の大手であるホンダの工場を訪問し、レクチャー、工場見学を行った。レクチャーでは、職員の方より HMIN とインディアナ州政府の関係、本社との関係、等のお話を伺った。また、グローバル企業としてのホンダの戦略についてなど、参加者より積極的な質問も見られた。工場見学では、ヘルメットをかぶり、実際の自動車の制作過程の現場を見ることができた。優れた日本の技術力の象徴ともいえるこの工場では、ただただ規模の大きさに圧倒されている参加者が多かったように思われる。訪問の記念に HMIN よりホンダの発明したロボット、ASIMO のストラップを頂き、工場を後にした。アールラム大学での夕食後は分科会でのを行った。前日のフィールドトリップの復習などを行った。JASC の生活にも慣れ始め、分科会活動もより具体的な議論を展開し始めたようだった。

7月30日(金)

KASC との交流

同じインディアナ州に位置する Trine 大学にて、KASC(Korea-America Student Conference) 参加者との交流を行った。KASC とは、JASC をアメリカ側で主催する ISC (International Student Conferences) の運営するもう一つの学生会議であり、2010 年度で第 3 回を迎えた団体である。開催地がお互い近かったこともあり、歴史上初めて、

3ヶ国合同の会議が開催された。はじめに、JASC と KASC の概要について、プレゼンテーションを行い、共に昼食をとった。その後、各学生会議の分科会が Speed Dating と称し、分科会のディスカッションや概要について、相手側の参加者へプレゼンテーションをする機会を設けた。KASC 側の分科会テーマは以下の 5 つであった。

- ・ The ABC's of Education: Exploration of Education
- ・ War and Peace: An Analysis of Differing Perceptions
- ・ The Green Life Movement: Social Movement of Going Green
- ・ U.S. and Korea in the News: Media for Cultural Understanding
- ・ Korea in 50 States: The Evolution of National Identity

「教育」「戦争と平和」「環境」「ナショナルアイデンティティ」などテーマが重複している分科会もあり、参加者の積極的な質問が飛び交っていた。続いてスペシャルトピックを行い、日米韓の関わるトピックについて3国間の学生による活発な議論が展開された。トピックは①軍事と戦争 ②宗教 ③歴史教育 ④人種差別 ⑤女性のボディイメージと美容整形 ⑥技術協力 ⑦現代社会と伝統 ⑧社会保障 ⑨企業の社会的責任 ⑩メディアの社会的役割 ⑪恋愛 ⑫大学教育と学生生活 という、アカデミックなものから学生らしいものと、多岐にわたり、大変興味深いものとなった。ディスカッション後には大学の体育館にてゲームを通して各々の文化を紹介し合い、親睦を深めることができた。夕食時にはディスカッションの続きやお互いの文化について話が盛り上がる参加者が見られた。たった1日の交流であったが、普段接することのない「韓国」という視点をディスカッションに導入できたことや、数多くの友人ができたことでとても充実した1日となった。



写真：JASC と KASC の参加者全員で

7月31日(土)

リッチモンドツアー、分科会活動、日米ディナー

アラム大学の位置するリッチモンド市内をめぐるツアーを任意参加で開催した。奴隷解放時代の史跡である Levi Coffin House や、White County Historical Museum を訪問し、小都市リッチモンドの豊かな歴史を楽しんだ。また、クエーカーの大学であるアラム大学でのこの日の昼食は、オートミールや豆といった Simple Meal を取り、キリスト教の文化を体で感じることとなった。分科会活動後、その夜は日本側がお好み焼きやお餅を、アメリカ側がハンバーガーやスモア（焼きマッシュマロ）を振る舞い、日米の食文化を紹介しあい、インディアナサイトの最後の夕食を満喫した。事前に学んだお好み焼きの焼き方を披露することができて、参加者も満足していた。また、本会議中初のリフレクションを行い、第1サイトを終えての各々の感想、意見、提案など積極的な発言が飛び交った。



写真：お好み焼きを楽しむ参加者

■成果と考察

・アメリカ側参加者と日本側参加者の

相互理解のきっかけ作り

ゲームを通じてさまざまなアイスブレイキングを行ったり、自国の文化などを寸劇で紹介する「スキット」を発表したりすることにより、両国の学生のコミュニケーションを生むきっかけを作ることができた。また、日本側参加者が主体となり、日本の制服や浴衣、書道、茶道などを紹介するパーティーや、互いの食文化を紹介しあうバーベキューを企画したことは、互いの背景を知るきっかけ作りに貢献したといえる。

・地方としてのアメリカを知る

インディアナサイトが第62回会議全体を通しての唯一の地方都市であったため、「地方」としてのアメリカを学ぶ機会を多く設けた。州政府による講演会では、2割弱の労働人口が農業に携わっているというインディアナ州の農業への取り組みと実態について学ぶことができた。さらには、インディアナ州が地域活性化に向けて行っている政策についても、州政府の方から直接お話しを伺うことができた。また、リッチモンド市内ツアーでは、古きよきアメリカの地方都市としての歴史や伝統を学ぶことができた。これらの企画を通じて、他の3サイトとは一味違うアメリカの地方都市の魅力を、参加者が感じる機会を提供することができたように思う。

・アメリカにおける日系企業のプレゼンスを知る

インディアナ州には数多くの日系企業が誘致されており、日本経済に深く関係している。そのような中で、実際にどのように日系企業がアメリカで活動しているのかを、インディアナポリスで知ることができた。また、ホンダ自動車工場を訪問した際に、グローバル企業であるホンダの戦略や、いかにホンダにとって地理的にインディアナが重要か、といったことをご説明いただき、日本では知ることのできないグローバル企業の展開を目の当りにすることができた。インディアナで働く日

第3章 本会議・サイト活動

本人の方とも交流し、改めて日本とインディアナとの強い結びつきの背景にある、日系企業の重要性を理解することができた。

・KASC との交流

Trine 大学にて KASC の参加者と交流を行った。各々の会議の持つ分科会紹介や日米韓の関わるトピックについて3ヶ国間の学生によってディスカッションを行った。総計120名もの学生が集まりディスカッションを終えたのちはお互いの親交を深めるため各国の文化を紹介できるようなゲーム等のレクリエーションを行った。日米学生会議にとっては、韓国という新たな視点と触れ刺激になったと共に、今後も友好的関係を築く礎となった。

■サイトコーディネーター後記

【坂田 奈津希】

インディアナサイトは、第62回日米学生会議のテーマである「世界の問題を、私達の課題へ～異なる個の生む衝突と共鳴から～」を強く意識したサイトであった。会議の幕開けとなる第一サイトであることを念頭に置き、参加者が「衝突」できる場を多く設けるように心がけた。異なる個の生む「衝突」からこそ、「共鳴」が生まれる。本サイトは、その「衝突」の種をできるだけまけるよう、参加者同士やインディアナの方々など、あらゆる人との交流の機会を大切にしたい。その中でも、日米学生会議史上初めてであった KASC の学生との出会いは、大変刺激的であったように思う。「世界の問題を、私達の課題へ」と掲げている以上、「日米」だけにとらわれたくない。そんな私達の想いが、白熱したディスカッションや食事をともにしながらの何気ない会話を通じて KASC 参加者にも伝わり、お互い「共鳴」ができたのではないだろうか。

また、多少なりともイメージが湧く他サイトと比べ、インディアナは特に日本側参加者にとって全くの未知の世界だった。しかし、そんなインディアナも、実は古くから日本と関係の深い土地だ。よって、日米学生会議がインディアナに行く意味

を持たせるためにも、アメリカの視点から見ることで日本を再発見できるようなコンテンツを多く取り入れるようにした。州政府講演会やアーラム大学史の講義などを通じ、インディアナと日本の歴史や現在の関係についてより深く学ぶことができた。また、Honda Manufacturing of Indiana ではアメリカにおける日系企業の実態を垣間見ることができ、関係者の方々には多大なるご協力をいただいた。特に日本側参加者にとっては、今までに見たことのない新しい形の日本を発見することで、参加者は自国観とも「衝突」することができたのではないだろうか。

なかなか訪れる機会のないインディアナであるからこそ、たくさんの方々のご厚意に助けられた。私達のために施設を提供して下さった Earlham College には特に深く感謝の意を述べたい。Earlham の恵まれた施設なしには、本サイトは成り立たなかった。また、あらゆる面でサポートしていただいた Larry Ingraham 氏にも特別御礼を申し上げたい。日本でお会いした際に「Please ask me anything」との力強い言葉をかけてくださり、サイトコーディネーターだけでなく、本会議中の運営でも大変お世話になった。

最後に、インディアナチームとして、何度も丁寧打ち合わせに付き合ってくれた Yudai、持ち前の安定感でサイトを動かしてくれた Diane、いつも隣で一緒に奔走してくれた高田に心から感謝したい。また、インディアナサイトを自分のものにしようと、主体的に活動してくれた参加者のみんなにもありがとうの気持ちを伝えたい。

この場を借りて、インディアナサイトをご支援いただいた全ての方に、御礼申し上げます。ありがとうございました。

【高田 修太】

リッチモンド。そう聞くと、普通はバージニア州のリッチモンドを思い浮かべるだろう。しかし、今回我々が訪れたのはインディアナ州のリッチモンドであった。私自身、実行委員となるまで、この州の存在、そして当然この街の名前など、全く

知らなかった。「他の三か所のサイトに比べ、圧倒的に知名度が低い。」そう思ったからこそ、今年度の日米学生会議においてこのサイトのコーディネートを担当した。

第1サイトとは、そもそもどのような意義があるだろうか。最も重要な点として、「参加者同士の親睦を深める」ということが挙げられるだろう。フォーラムや見学等、JASCらしいプログラムが存在する中でいかに参加者が仲良くなることのできるプログラムを入れるか、ということは常に悩みのタネであった。そのような状況ではあったが、私はこのインディアナサイトが第1サイトとして選ばれたことは大変よかったと今では思っている。なぜならば、滞在先のアーラム大学が、素晴らしく過ごしやすい大学であったからだ。大変失礼な言い方ではあるが、アーラム大学の位置するリッチモンドは非常に田舎であり、大学周辺で夜中に楽しめるお店やレストランはほとんどなかったのである。それゆえに、常に参加者はドミトリーに滞在し、広いロビーのソファに座って、長時間分科会を越えて交流していた。そして、日本側参加者の積極性が生み出したのは、日本文化紹介の時間であった。(私たちはこれを「鳥獣用(超重要)企画」と呼んでいた!) この企画では、和服や高校の制服をはじめ、書道・茶道用具など、かなり重いものを日本から参加者が持ち寄って、アメリカ側へと紹介してくれた。私たちECがあまり言わずとも、彼らが自主的にこのように動いてくれたことは、ECとしても、1人の参加者としても、とても誇りに思うと同時に感動し「やはりJASCは参加者全員が一体となって作り上げるものなのだ」と、ひしひし感じるようになった。

また、インディアナは移動時間が多いことも、参加者の親睦を深める点でプラスに働いたのかもしれない。私自身、2~3時間のバス移動の中、多くの参加者と本当に様々なことを話し合った。人権問題について討論したり、日本語を教えたり、そのような「話すことしかできないフリータイム」という予期せぬ「プログラム」によって、多くの参加者が親睦を深められた。

総じて、インディアナサイトは普段見ることのない日本像を垣間見たり、KASCとの交流で様々な点で衝突と共鳴を繰り返したり、加えて、普段の活動を越えて友情をはぐくむことができたサイトであったと言えるだろう。

最後に、このサイトでは、JASCのOBでもあるLarry Ingraham氏をはじめ、たくさんの方々にお世話になった。この場を借りて、お礼申し上げたい。また、アメリカ側実行委員として、インディアナサイトの大部分をコーディネートしてくれたYudaiとDiane、そして私の拙い英語や力不足を常に隣で支えてくれた坂田奈津希にも感謝したい。さらに、超重要企画を主導してくれた参加者であり第63回のECでもある井上聡美にもとても感謝している。多くの方々に支えられ、無事成功に終わったこのサイト。参加者の心に深く刻まれば、幸いである。本当にありがとうございました。



写真：インディアナサイトコーディネーターズ
(左から坂田・Yudai・高田・Diane)



写真：初めてのリフレクション後、全員で